

福祉保健 委員会

調査項目

第5期介護保険事業計画について 地域医療について

地域の高齢者を支える

こぶし園施設長の小山さんの言葉から…

「施設に入りたくても入れない『待機者』が増え、施設の増設が要望されている現状がある。しかし、高齢者が施設で暮らすことを本当に望んでいるのだろうか？住み慣れた地域から離れて見知らぬ人と同じ部屋で暮らすことを幸せと感じているのか？いやそうではない。多くの高齢者は地域社会の中で人生を継続したいと願っている。」と話すのは、施設長の小山さん。この小山さんは大きな社会福祉法人の理事長、東北の災害にもボランティア団体を率いて活躍をされる大変行動的な方です。

その小山さんは、高山市の現状を訴える私たち議員にこんな話もされました。「富士山の登頂に例えるならば、登頂したいが天候の悪化や体調不良でこのまま進めない。そこで8合目付近の避難小屋にいったん入る。ところが、避難者が後を絶たず、この避難小屋をもっと作れといわれているようなもの。私たちがすべきことは、在宅で困っている人が自宅で暮らしていけるよう、知恵をしぼり環境を整えることだ。避難所を増やすことではない。」このような中、小山さんは次のような方法で地域の高齢者を支えています。まず、365日24時間のサービスは、施設の夜勤者を少し増やして、施設内だけでなくご近所も一緒にケアするにすれば、施設に入らなくても暮らしていける人が増える。また巡回型訪問介護サービスはテレビ電話を導入すれば、困ったときに顔が見える形で見守りケアができ、介護度5の人でも家で暮らすことはできる。

まさしく地域包括ケアシステムが構築されていました。

◆高齢者の希望と現状について

新潟県長岡市にある「高齢者総合ケアセンターこぶし園」にて施設待機者の課題にどう向き合えば良いのかを目的に視察しました。

来年度からの介護保険のモデルともなり、多くの国会議員が視察に訪れているサービスタ付高齢者住宅です。

特別養護老人ホームとグループホーム、そして高齢者用住宅が合築された建物で総工費3億円ほど。いずれも自由に出入りでき、近所の子どもも遊びに来ます。お酒のボトルもカウンターに並んで、高齢になり障がいを持ってもまだまだ人生を楽しんでいる。そんな「目からウロコ」の視察となりました。



常時介護士とつながるテレビ電話

◆地域医療はどこまでどう確保すればよいのか

長野県松本市の医療法人相澤病院を視察しました。

高山市から自動車ですら2時間足らずの所に「神様のカルテ」で有名な当病院があり、人口約21万人の松本市の地域医療支援病院となっています。この地域医療支援病院とは、病院や診療所で役割分担をし、初期治療はかかりつけ医、入院患者を病院が診るといった形です。

具体的には①地域の医師が相澤病院の建物・設備機器・病床を共同利用することができ、②地域の医療従事者に対し研修を実施しています。

また、時間外の急病やけがに対応することも大きな役割であり、屋上にはヘリポートがあり、救命救急室に直結していました。

このような役割分担の中で、かかりつけ医とカルテもICT（情報通信技術）によりつながっており、在宅との連携もスピーディーにできています。

また、補助金もないなかで、先進医療（がんの陽子線治療など）を整備中であり、多くの若い医者にとっても魅力的な病院となりました。

これからは、医療を産業として積極的に患者を集める病院が出現する一方、無医地区により過疎化が進展する地域も増加するなど、格差は益々拡大していくと思われました。

高山市ではどこまでの医療を担保していけるのか。大きな課題です。

このように役割分担



相澤病院屋上ヘリポートにて